

Title	明代福建の宗族と風水林：万木林説話をめぐって
Sub Title	Lineage organization and Fengshui forests in Ming period Fujian
Author	魏, 郁欣(Wei, Yu-hsin)
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.67(67)- 86(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明代福建の宗族と風水林

——万木林説話をめぐって——

魏 郁 欣

はじめに

風水の観点からいえば、万物を生みだし働かせる気が満ち溢れている土地は風水的に優れているとされている。また、龍脈（気の流れる経路）上の樹林や穴（気が沸き上がる地点）を取り囲む樹林は気を墳墓に導入する効果⁽¹⁾および風が気を吹き散らす事態を防ぐ効果があるとされ、しばしば風水林と呼ばれている。とくに中国東南部の福建では明代以降風水思想が流行し、風水林の育成にかかわる人間の活動が慣習的に行われるようになった。それは全国的にも群を抜いていた⁽³⁾。

また、福建は宗族組織の発達が見られる地域の一つでもあった⁽⁴⁾。風水知識およびその実践が中国東南部においてとりわけ普及したのは「この地域に顕著に発達の見ら

れた父系の宗族が、自らの祖先の墓地の風水に対する積極的な関与を行ってきたからである」とされるように、宗族組織と風水慣習の両事象は密接不可分の関係にあったと考えられる。実際、族有林（一族共有の樹林）と風水林とが重なることもあったという⁽⁶⁾。

風水林について言及したこれまでの研究は、①それを切口として中国人の風水観を説明するもの、ならびに②この風水観が生態環境の保全をいかに促進したのかを考察するもの⁽⁸⁾、の二系統がある。これらの研究には風水の保全のために風水林を設置することが共通の前提であった。ただ、筆者が福建宗族と墳樹（墳墓の周辺に生える樹木）との関連についてこれまで考察した結果、風水慣習をめぐる人々の行動は実に多岐にわたることが明らかになった⁽⁹⁾。筆者の見解が正しいとすれば、風水林をもつ

ばら風水の保全にかかわるものとしてとらえるだけでは、その多様性を見誤る恐れがある。

そこで本稿では風水慣習の一つとしてしばしば取り上げられてきた風水林に改めて着目し、明代福建の宗族がそれに自ら関与したことにはどんな意味があったのかを問うことにしたい。そしてその具体的な事例として福建建甌(當時は建寧府建安縣)の万木林と呼ばれる自然保護区を挙げる。元代に成立したとされる万木林は本来風水上の理由に基づいて植えられた樹林ではなかった。ところが十五世紀以降、万木林の創設者楊達卿の孫楊栄の科挙合格を契機に万木林がいかにしてその科挙合格を生み出したのかをめぐる説話(万木林説話と呼ぶ)が数多く定められた結果、一般樹林であった万木林は物語言説において風水林として描かれるようになった。ここでは福建建甌の楊一族が共同で所有する万木林をとおして、一般樹林が風水林へと転換していった過程について考察し、それによって明代福建の宗族と風水林との関連を改めて検討する。

なお、本稿で主に用いる史料は『楊族之譜』一卷、『八閩三楊匯譜(楊栄世家卷)』、『中華楊氏通譜(古代卷)』などの族譜関連資料、および万木林説話の作成を

主導した楊栄の別集『楊文敏公集』⁽¹⁾である。

一、風水林として描かれた万木林

1 楊達卿の万木林設置

万木林は万木山ともいい、茶の産地としてよく知られる武夷山の東南、すなわち現在福建省南平市の管轄下にある建甌・建陽・順昌の境界が接する場所に位置している。二八三五畝の面積を有する万木林が中国最初の自然保護区の一つとして認められるようになったのは一九五七年のことであるが、万木林そのものの歴史は古く、「元代の楊達卿が資金を出し樹木を栽培した」ことを嚆矢とする。

楊達卿(？―一三七八)は建安(現在の建甌市)の人。名は福興。内閣大学士として明朝五代宣德帝に重用された楊栄はその孫である。裕福な家庭に生まれた楊達卿は、「宗族の中の貧者や病者、喪葬を行えず独身で婚嫁ができない者をみな救済した。また、同郷の人々に対しても同様であった」⁽¹⁴⁾といわれるように、慈善事業を積極的に行った人物として高く評価されている。この意味において、楊達卿の万木林設置は主に慈善事業の一環として位置づけられる。すなわち万木林は「学校・祠廟・橋梁の

建設や貧民の保養・葬儀などのために用いられる⁽¹⁵⁾」ことを主要目的とするものであった。また楊榮がその孫であったことから、楊達卿は死後に「少傅工部尚書兼謹身殿大学士」が追贈された。

2 万木林説話について

万木林成立後、元末に建寧路総管を務めた阮徳柔⁽¹⁶⁾はそれを地域社会の発展に貢献するものとし、万木林の繁茂ぶりを褒めたたえる「万木図」を描いたという⁽¹⁷⁾。結局のところ「万木図」は後世に残らなかったが、これ以外の万木林を題材とした文章はいくつか伝わっている。現存するものとして、楊榮「万木図事実記」⁽¹⁸⁾、胡広「万木山記」⁽²⁰⁾、楊士奇「楊氏万木図序」⁽²¹⁾、王孟端「万木図歌・為楊庶子榮作」⁽²⁴⁾、金幼孜「万木図記」⁽²⁵⁾などが挙げられる。これらは便宜上の総称として万木林説話と呼ぶことにする。万木林説話のなかで、楊榮による「万木図事実記」は万木林の由来について最も詳しく記している。その内容は以下のようになる。

その昔、亡くなった祖父達卿公は生まれついての至誠孝行の人であり、善行を楽しみ、道義を好んだ。祖墳のあるところ、必ず子孫を分居させ、祭祀に供

した。竜津大富山は先代の墳塋があり、公はその傍に居を構えた。山は数十里にもつながり、ふもとは肥沃な土地だった。毎年春耕のときになると、公は族人を率いて自ら耕作して収穫に備えた。朝夕の努力を怠らなかつたため、収穫はほかの土地と比べ倍になった。公は決まった量を祭祀に供するほか、残りを蓄え、さらに機舂〔水力を利用した挽臼〕二機を置き、借りた者には随意貸しだした。数年後、庫は粟でいっぱいになった。大凶作の年、地域の人々は食べ物が乏しくなつた。公は庫を開いて救おうとしたが、人々が勘ぐるのを心配し、大富山で植樹する人足を募ることを口実に、「杉木一本を植えた者には報酬として粟一斗を与える」といった。すると貧民が続々とやってきた。公は彼らが来れば食べ物を与え、粟を給して立ち去らせ、その名を記録することをしなかつた。粟がなくなると、門を閉じて昼寝した。夢に突然大富山から一人の白衣を着、杖をついた老人が訪れてきて、「お前が植えた木が青々と茂つたのに、どうして見にいかないのか」といった。公は不思議な夢だと思つたが、その時は気に留めなかつた。だが何年後、山木が繁茂し、四方

に広がり整然と並ぶさまを目の前にして老人の夢を思い出し、「たとえ昼夜をとおして休むことなく繁殖したとしても、たとえ雨と露の恵みによって潤し

養うことができたとしても、こんなに短い期間で整ったことはない。まさかの山の神靈からの助けなのか」と感嘆した。そこで族人に向かつて「当初は木を植えるつもりはなく、ただ、これにかこつけて貧民を救おうと思っただけだった。実際に植えたかどうか、確かめたことはなかった。今こんなに茂ったのは決して偶然ではない。お前たちは私のいうことに従い、この山の木は誓って他人に売ってはならない。橋梁、学校、寺院、祠堂などの建設にだけ用いよ。貧しくて住まいがない者や死んで棺がない者がいれば、彼らに与えよ。私のいうことに従わない者は賢明な子孫ではない」と戒めた⁽²⁷⁾。

後述のように、洪武年間（一三六八―一三九八）、楊榮の伯父は父の死後、寺院の改築に用いられる建材を民間に提供するために、大富山に植えられた杉木をこごとく伐採した。ところが、いったん消えてしまった林木はまた盛んに生い茂るようになった。その繁茂ぶりを見て人々は「公〔楊達卿〕は人を活かす徳行があったがゆ

えに、その樹木は生気が満ち溢れている。公の子孫の繁栄はまさにその繁茂ぶりと似ている。それはすべて公の遺沢によるものである」と非常に感心したという⁽²⁸⁾。

また、金幼孜「万木図記」にも似たような話の展開が見られる。すなわち、楊達卿が死んで二十余年後、いったんなくなった杉の木がまた復活し、「人々はみなそれを公〔楊達卿〕が徳積みを長い間に重ねてきた応報であると見なした。林木の繁茂を見るのは決して偶然なことではない。それはまさしく公の子孫繁栄の現れである」という⁽²⁹⁾。

さらに胡広「万木山記」には「楊達卿は人に及ぼす徳があるがゆえに、その山木が青々と茂り、そこから彼の遺沢の深さがわかる、と人々はいう⁽³⁰⁾」とあるように、これもまた万木林の繁茂ぶりと楊達卿の善徳とを結びつけている。

以上から明らかなように、楊達卿が元代に万木林を成立させたのは学校・祠廟・橋梁の建設および救貧のためであった。すなわち万木林は風水の保全を目的とした風水林的存在ではなかったのである。ところが、明代以降に著わされた万木林説話では、「楊達卿の徳行により万木林は一般の樹林と比べ一層繁茂する風水林へと変貌

し、そしてその効果として子孫繁栄が遂げられた」といった当時流行していた風水的な説明論理がしばしば用いられるようになる。では、その意図は一体どこにあるのであろうか。

二、楊榮と個々の風水説話

1 楊榮と万木山説話

楊榮（一三七一～一四四〇）は建安の人、字は勉仁、初名は子榮。建文二年（一四〇〇）の進士。最初は翰林院編修に任命されたが、その後、丁寧な対応で永楽帝に好感を抱かせたため、文淵閣に入り、名を榮と改めた。同時に入閣した七人のなかでは、楊榮が最年少であったという。楊榮は以後、翰林院侍講、右諭德（太子の侍從）に昇進した。永楽帝の北巡に従うこともしばしばあった。永楽五年（一四〇七）に右庶子（太子の世話係）、永楽十四年（一四一六）に翰林院学士（長官）に拔擢された。³¹⁾

楊榮は「万木図事実記」の最後において、自分自身が永楽帝の知恩を受けて右庶子を兼ね、さらに翰林院学士に選ばれたのは「実にわが先祖が徳積みを重ねてきたからである」と述べている。ここでいう徳積みとは、楊達

卿が育林をとおして救済活動を行ったことを指している。すなわち右庶子と翰林院学士との両官職を兼任し、順調な官界生活を歩み始めたといった既成事実に対し、楊榮が自己解釈を試みた成果の一つはまさにこの「万木図事実記」であった。

さらに自己解釈の信憑性を高めるために、楊榮は知り合いの何人かの有力政治家にも説話の作成を依頼した。前述の「万木山記」、「楊氏万木図序」、「万木図歌・為楊庶子榮作」、「万木図記」はこうした背景のなかで誕生したものであると思われる。すなわち永楽五年（一四〇七）に永楽帝の北巡に付き添っていた胡広と金幼孜の二人はそれを契機として楊榮との交際を深めた。楊士奇は永楽元年（一四〇三）に翰林院編修を担当した後、間もなく侍講に昇進した。王孟端は同年に文淵閣に入った。楊榮と似たような経歴を持っている二人はそれゆえに楊榮との親交があった。かくして、楊榮は官界において何人かの政治家と親交関係を築いたため、説話の作成を依頼することができたのではなからうか。

2 楊榮と白鶴山説話

ところで、「万木図事実記」の作成よりやや早い時期、

すなわち翰林院編修に任命されたとき、楊榮は祖父楊達卿の墓地が設置された白鶴山にかんする説話をすでに著わしていた。その一部は以下のである。

私の出身地建寧には府城から東へ二里離れたところに山がある。それは高々とそびえ、その勢いの盛んなさまはまるで鶴かのである。……実に重みのある吉地であり、大勢の人々がそこに埋葬地を求めたが、叶わなかった。祖父は存命中、徳行・善行を積み、孝行を尽くして亡くなったが、なかなか墓が決まらなかった。ちょうどそのとき、真如寺の僧侶無涯が寺の改築工事を行おうとしたが、建材が足りなかった。そこで郷紳の蘇明遠を誘い、二人で家を訪ねてきて木材を分けてもらうように求めた。伯父楊彥楨はすぐに兄弟を集め、竜津の木三万本を与え、さらにその運搬費を出した。無涯は大いに悦び、その後、祖父がまだ埋葬されていないことを知ると、ついに白鶴山の土地を献上し、「ここはかつて大金で買おうとする人がいたが、私は同意しなかった。それはこの土地にふさわしい人が現れるのを待ったためだ。今この土地でもって札にしたい」といった。そこで占って吉の結果が出ると、埋葬することにな

った。……私が府学に通っていたとき、弟たちをそこに連れていってともに勉強したことがあった。後に科挙に合格し、翰林院に職を得て、特別の恩遇を受けられた。これはすべて先祖の遺沢によって得られたものである。⁽³⁸⁾

この白鶴山説話は万木林説話と同じく、楊達卿の「徳行・善行を積むこと」（「種徳積善」）によって白鶴山という吉地が与えられたといった風水的な説明論理を用い、科挙合格およびそれに伴う出世について楊榮が自己解釈を試みたものである。

3 もう一つの風水説話…白狸眠処説話

実は楊一族にはもう一つ古くから伝わってきた風水説話がある。それは崇安県へ移住したことから「崇安開基祖」と認められる楊宗興の埋葬地、すなわち「白狸眠処」を題材としたものである。その一部は以下のような。

公（楊宗興）は八五歳の高齢で亡くなった。息子たちは父の遺体を舟に載せ、埋葬地を探そうと決めた。建甌県豊楽里で舟を停めると、川西にたまたま風水師がいた。彼は近づいてきて、「舟に乗せてもらえ

るか」と尋ねたので、兄弟はみな許した。翌日、その風水師がまたいた。このようなことが三たびにもなったが、兄弟は嫌な顔一つをしなかった。風水師は「おれはできないが、父君の遺骸がまだ埋葬されていないとなれば、吉地を教え、それで三たび舟に乘せてもらった恩義に報いることにしよう」といい、ある山を指して「この山は武夷山から発し、清々しい気はまるで一本の筋が通っているかのようである。その川は崇安県より流れ、水流の音は雷のようである。形は雌雄を成している。竜会穴には、体がまっすぐに伸びたままで眠っている白狸がいる。乙に座して辛に向かっている。案山〔穴の前方に見える山並み〕は筆置きの形をしている。前は文峯、後は三台。今日はまさしく埋葬に良い日だ。お前たちは今夜急いで白狸が眠る処を探してみよ。そこに埋葬すれば、子孫は自然に繁栄する」といった後に、立ち去った。引留めようとしたが、果たせなかった。兄弟はその言葉に従い、その日の夕方に棺を担いで山に登った。五更〔午前四時〜六時〕になると、寒々とした風が体に当たり、激しく鳴る雷で驚いて起きた白狸は体を三回伸ばし三回跳び上がって立ち去っ

た。兄弟は急いで父の遺骸を白狸眠処に埋葬し、舟で帰った。それは宋真宗大中祥符四年（一〇一一）十月二十一日のことであった。風水師がまた訪ねてきて「体がまっすぐに伸びたままで眠っている白狸がいたか」と聞いた。兄弟は「本当にいた。雷の音に驚き、体を三回伸ばし三回跳び上がったら、悠然として立ち去った」と答えた。風水師は「体を三回伸ばし三回跳び上がったというのは、三代にわたって朝廷の高官を輩出し、富貴を永遠に得られることを意味する」と祝賀の言葉を贈った。兄弟は風水師を家に招き入れたいくらい感謝し、さらにその字名を尋ねて謝礼をしようとしたら、風水師は「今吉地を得たのは、お前たちの先祖が何代にもわたって徳積みを重ねてきたからである。それは決して偶然ではない。敢えて報酬を望もうや」といい、固辞して立ち去った。兄弟は風水師を引留めようとしたが、果たせず、「あの人はもしかして仙人か？」といい、舟を返して家に戻った。⁽³⁴⁾

これはまた楊一族の善行、すなわち楊宗興の子楊孟慶・楊仲祥・楊季瑞が風水師に助け舟を出したことによって「白狸眠処」と呼ばれる最高の吉地が与えられたと

いった話の展開からみれば、前述の二説話と若干似てゐるかもしれない。ただ、楊榮の科挙合格を合理的に説明する際、楊一族自身がこの説話を用いることはほとんどなかった。

楊宗興の長男楊孟慶は永安県（現在の三明市に位置する）の主簿、三男楊季瑞は劍州（現在の南平市）の刺史を務めた。楊季瑞の長男楊緯は宋紹興二十八年（一一五八）に、次男楊緘は宋乾道六年（一一七〇）にそれぞれ進士となった。進士となったことについての詳細な記載は見つからないが、楊緘の長男楊臻は吏部員外郎、楊臻の長男楊鉉は刑部尚書にそれぞれ任命された。³⁵ 換言すれば、風水師の祝賀の言葉に「体を三回伸ばし三回跳び上がったというのは、三代にわたって朝廷の高官を輩出し、富貴を永遠に得られることを意味する」とあるように、この説話は楊榮の科挙合格というよりも、むしろ宋代における「三代にわたって朝廷の高官を輩出した」といった既成事実に対する楊一族の自己解釈である。

ところが楊一族のみならず、他者による史料においても「白狸眠処」について言及したものがいくつも見られる。たとえば、「この土地は甌寧県の豊楽里にあり、地名は白狸窩である。仙人が白狸の眠る処を指示したので、

今地元の人々はここを白狸窩と呼ぶ。……まさに富貴を生みだす最高の土地である」³⁶とあるように、楊宗興の埋葬地は最高の風水宝地として当時の風水書『地理人子須知』³⁷によって大いに取り上げられていることが知られる。風水専門家による認可を得て自他ともに認める好風水になったがゆえに、「楊宗興が」埋葬されて三〇〇年の後、文敏公楊榮が工部尚書、曾孫楊旦が吏部尚書となった。科挙合格者が連続して輩出し、官にある者は数十人に至った。今に至るまで繁栄してとどまるところを知らない」³⁸とその風水的な効果は絶大であると語っている。

さらに同時代の地方志にも次のような白狸眠処説話が収録されている。

楊万大は崇安の人、物静かな性格で、武夷山で住まいを構え、山川の間で魚を採ったり木を伐ったりの生活をしていた。夜は灯をつけて独り坐し、琴を弾いたり詩を詠んだりすることを自らの楽しみとした。山のふもとに渡し場があった。ある日の夕方、黄色の冠をつけ黒い服を着た立派な顔立ちの道士が来た。武夷宮に行く途中であるが、夜の泊まり所が見つからないというので、門をたたいて楊万大の家に投宿するよう求めた。その後、道士はたびたび来たが、

楊万大はそのつど彼を賓客として遇した。しばらくするとその回数はますます多くなった。ある日、道士がまた来て「私はこの世の者ではない。今神仙の地に戻らなければならなかったので、わざわざお前に別れを告げにきた。お前の行いが非常に善いの見れば、天は必ずそれに報いる。ただ、お前は年なので、報いは子孫にあるだろう」といい、船頭に命じて楊万大を連れていこうとした。楊万大は初めていぶかしく思い、しばらくすると憂鬱な様子で、「両親は亡くなっているが、まだ埋葬していない。どういて一緒に行けよう」と答えた。道士は、「埋葬が終わるのを待って、一緒に行っても遅くない」といった。そこで二人は舟に乗り、甌寧県豊楽里へ向かった。豊楽里に着くと、道士は澄んだ水が蛇行する川や美しい山を指し、「某年某月某日に両親の棺をここに運んできなさい。白狸眠処があれば、そこが墓所だ。白狸が起きれば、それが埋葬のときだ」といった。その日になると、楊万大は棺を山中に運んだ。果たして白狸がいたので、いわれたとおり両親の遺体をそこに埋葬した。一年も経たないうちに、他所に住む子孫たちがその土地の豊かさを聞

きつけ、大勢でやってきてここに住んだ。そのため、その土地は「楊墩」、墓所は「白狸」と名づけられた。当時、楊万大はすでに九七歳になっていた。昼寝をしていると、夢のなかで道士が迎えにきて、「今、埋葬が終わったので、私と一緒にいこう」といった。楊万大は目覚めるとすぐに沐浴して衣服を改め、端坐して亡くなった。現在の太師文敏公楊栄は楊万大の子孫である⁽³⁹⁾。

後述のように、楊万大（すなわち楊宗興の三男楊季瑞）が崇安県から甌寧県へ移住した後に、一族が豊かになり、元々「陳墩」と呼ばれていた土地はそれゆえに「楊墩」と改名された。この説話は甌寧県における楊一族の繁栄について説明を行うために作られたものである。ただ文末に「現在の太師文敏公楊栄は楊万大の子孫である」とあるように、作者は特書すべき点としてわざと楊栄と楊万大との関係性について触れている。

楊一族は白狸眠処説話と、宋代における科擧合格者や任官経験者の輩出とを結びつけているが、ただ、風水書や地方志に見る白狸眠処説話とおし、地域の人々は、①「楊宗興が」埋葬された三〇〇年後、文敏公楊栄が工部尚書となった」、②「現在の太師文敏公楊栄は楊

万大の子孫である」とあるように、楊榮の成功する理由を楊宗興の埋葬地の風水効果に求めていることがわかる。

さらに「本族には墓地一箇所があり、甌寧県豊楽里の楊墩に位置し、牌坊が建てられた。それは先祖が仙人から、白狸眠処と呼ばれる土地に祖先宗興公を埋葬するよう指示を受けた墓穴だ⁽⁴⁰⁾」とあるように、楊榮自身もこの説話の存在を認識していたようだ。とすれば、楊榮の科挙合格およびそれに伴う出世は白狸眠処の風水効果に由来するものだと地域の人々が説いているのと同じように、既存の白狸眠処説話をそのまま利用すれば済んだはずだが、なぜ楊榮はあえて新たな風水説話（万木林説話、白鶴山説話）を作ることに入れたのか、といった疑問が浮上する。

三、楊榮を取り巻く宗族の危機的状況

なぜ風水説話を新たに作成しなければならなかったのかを考察するためには、まずこの両説話の成立年代、すなわち一四〇三年から一四一六年にかけて楊一族がどんな状況にあったのか、それに対して楊榮はいかなる対応を試みたのかについて見る必要がある。

1 楊一族について

隋の煬帝（楊広）に殺害される危険を避け閩の呉興（福建省浦城県）へ逃れてきたといわれる楊秀（楊堅の四男）は「入閩始祖」になったが、それから十六世代後に浦城県からさらに崇安県へと移住した楊宗興は「崇安開基祖」とされた。宋代、楊宗興の長男楊孟慶は崇安県にとどまるが、次男楊仲祥は建陽県、三男楊季瑞は甌寧県へそれぞれ移住した。こうして楊一族は三つの系統（崇安・建陽・甌寧）に分かれた。⁽⁴¹⁾ そのうちとくに、甌寧派は「人が多く家が富む」ようになり、楊季瑞が最初に移住した「陳墩」はそれゆえに「楊墩」へと改名された。⁽⁴²⁾

前述のように、楊季瑞の長男楊緯、次男楊緘、さらに楊緘の長男楊臻、孫楊鎮はそれぞれ進士となった。とくに刑部尚書になった楊鎮は退官後に故郷に隠居し、その際には、陳源中横嶺頭にある複数の土地を購入し、そこから生みだされる小作料を蒸嘗（祭祀財産）に充てた。また先祖の墓地として官路辺山を購入してそのなかに会宗祠を建て、墓地を管理する住み込み専従祠僧を雇った。さらに楊宗興の埋葬地の白狸眠処に改修を施したうえ、楊宗興の功績や善行を顕彰するための牌坊建設を申請す

表一 【世系図（四十～六十六世代）】

秀⁴⁰ → 神佑⁴¹ → 縉⁴² → 林甫⁴³ → 琮⁴⁴ → 志操⁴⁵ → 璘⁴⁶ → 頴⁴⁷ → 喬⁴⁸ → 郊⁴⁹ → 承恩⁵⁰ → 守庸⁵¹ → 本立⁵² → 宗啓⁵³ → 璉⁵⁴ → 全⁵⁵

宗興⁵⁶
(崇安開基祖)

季瑞⁵⁷
(楊墩始祖)

仲祥
縉⁵⁸

絃
紹評⁵⁹
(竜津始祖)

緘
臻⁶⁰

緯
吾老⁶¹

文徳⁶²

福圭
達孝
達卿⁶³

伯安
伯成
伯祥
伯正⁶⁴

繼
貞
信
恵
富
榮⁶⁵

貴通
貴芳
賜
錫
襄
恭⁶⁶
(讓)

*本表は主に『中華楊氏通譜（古代卷）』一七四～一七九頁に基づいて作成したものである。

表二 【明代における建安竜津派の科挙合格者】

第六五代		
楊榮	洪武三十年(一三九七)	挙人
	建文二年(一四〇〇)	進士
第六七代		
楊仕偉	天順三年(一四五九)	挙人
	成化十一年(一四七五)	進士
楊仕儆	景泰四年(一四五三)	挙人
	天順元年(一四五七)	進士
楊仕儼	天順三年(一四五九)	挙人
第六八代		
楊易	弘治八年(一四九五)	挙人
	正徳三年(一五〇八)	進士
楊旦	成化十九年(一四八三)	挙人
	弘治三年(一四九〇)	進士
楊昉	弘治十一年(一四九八)	挙人
楊亘(初名楊晃)	成化十三年(一四七七)	挙人
第六九代		
楊崇	弘治十一年(一四九八)	挙人
楊邁	弘治十四年(一五〇一)	挙人
楊京	正徳十四年(一五一九)	挙人
第七十代		
楊肇	嘉靖十九年(一五四〇)	挙人
第七一代		
楊棐	?	挙人
	嘉靖三十二年(一五五三)	進士
楊成名	?	挙人
	嘉靖四十一年(一五六二)	進士

* 本表は嘉靖『建寧府志』卷一五、選舉、民国『建甌県志』卷一〇、選舉、および『八閩三楊匯譜(楊榮世家卷)』二、光輝世家、(四) 仕宦、に基づいて作成したものである。

ると、楊一族は墳墓における遠祖祭祀をとおして族人の結集力を向上させ、三つの分派を一つの宗族組織に統合⁽⁴³⁾することを可能にした。

しかしながら、楊鎡が宗族形成運動のなかで主導権を握った必然的な結果として、ほかの分派は相対的に弱い立場に置かれることになった。宗族内部における社会的な矛盾が激化したためか、楊鎡の叔父楊詔評は一人息子

の楊吾老とともに甌寧県を去り、隣接する建安県竜津へと移って新たな分派を形成した。楊吾老の曾孫楊達卿はこの建安竜津派に属している⁽⁴⁴⁾。

およそ七〇年後、すなわち一四〇〇年に楊達卿の孫楊榮の科挙合格を契機として何世代にもわたって科挙合格者や任官経験者を輩出したため(表二参照)、これまで宗族内部においてずっと弱い立場にいた建安竜津派は一

転して繁栄期を迎えた。

2 楊栄の試み…宗族統合

楊鎮を中心とした甌寧派は宗族組織の形成に積極的に取り組む動向が宋元期において見られたが、明代に入ると、今度は楊栄を中心とした建安竜津派がそれに取って代わって宗族組織の運営維持に全力をあげた。

たとえば永樂六年（一四〇八）、楊栄は族人の相互扶助に用いる共有財産を設置し、翌年、清白堂という祠堂を創設した。⁽⁴⁶⁾ また楊栄の主導のもとで宣徳六年（一四三三）、分散していた諸分派（崇安派・建陽派・甌寧派・建安竜津派）を包括した統合族譜が編纂された。⁽⁴⁷⁾ さらに正統四年（一四三九）、膨大な費用をかけて「崇安開基祖」とされる楊宗興の墓道を改修した。⁽⁴⁸⁾ なお楊栄のみならず、建安竜津派に属するほかの族人にも宗族組織の運営維持に取り組む傾向があった。たとえば楊栄の次男楊讓は宗族中の生活困難者の婚嫁・喪葬に用いる田産を自ら購入した。⁽⁴⁹⁾

正統五年（一四四〇）、崇安派に属する族人楊季昶から当該分派の支譜の序文執筆依頼を受けた楊栄は、その文において、「一族を挙げて福建に入ったが、建陽に住

む者、建安に住む者、浦城崇安に住む者、浙江の竜泉に住む者が現れた。盛んだった楊氏はついにこんなになつてしまった」⁽⁵⁰⁾と嘆いている。したがって宗族組織の維持・強化に積極的に関与した楊栄の最大目的は仕官や商売のために全国各地に散在する「吾建（建安）甌（甌寧）楊族」の結集力の向上にあったものと思われる。

以上のように十五世紀以降、科挙合格や任官などを契機とし、楊栄は族内指導者として諸分派の統合に尽力していたことが知られる。ただ族内での指導権を確保しようとするならば、優越的地位に立つ正当性について合理的に説明する必要があった。その際、彼の用いた説明論理が風水説話だった。既存の白狸眠処説話は楊宗興の埋葬地について言及したものであるため、その有効範囲は楊宗興以下の諸分派にまで及んでしまい、建安竜津派だけが栄える理由を説明するにはいささか説得力を欠いた。それゆえ、それと性質を異にする別の風水説話を作成する必要が生じた。それがすなわち万木山説話と白鶴山説話であったと推測する。

3 なぜ風水説なのか

万木林説話と白鶴山説話は楊栄の科挙合格やその後の

出世、建安竜津派の繁栄の理由を説明するために作られたものである。相手にわかりやすく理解させるためには、当該地域で幅広く共有されている説明論理を用いるのが便利であった。それが風水思想である。

明代福建の風水書『地理独啓玄関』⁽⁵²⁾には、徳を積んだ人間にその報いとして天が吉地を与えろといった教示が数多くある。⁽⁵³⁾また「先師は禿山に埋葬してはならないといった。⁽⁵⁴⁾それは生育する生氣がないからである」というように、吉地とは具体的には、草木の繁茂しているような自然が豊かな土地を指す。それはつまり生氣（生き生きとした氣）に恵まれているからである。

『地理独啓玄関』における「徳積み」と「草木の繁茂」の言説は明代の福建地域にある程度馴染みのあるものであり、楊榮自身もこうした風水觀念を念頭に置いていたと思われる。たとえば楊榮はかつて自身の風水認識について「徳があれば、知られることや報いられることを求めなくても、天の報いには背くことはできない」と述べているように、徳行を積んだ者は天の報いを必ず受けるものと信じていることがわかる。また「草木はちっけなものだが、その繁茂は人の繁栄を占うに足る」⁽⁵⁶⁾との発言があったことからみれば、草木の繁茂に対応する人間

界の繁栄をも信じていたといえよう。

以上のように、楊榮は明代福建の風水書によく見られる「積徳」と「草木の繁茂」との二大要素を活用し、物語言説の側面において祖父楊達卿によって設置された万木林を、一般の樹林から風水林へと人為的に転換させようとしたのであると考えられる。

おわりに

楊一族は人口増や移住地の開発に伴い宋代以降において四つの派（崇安派・建陽派・甌寧派・建安竜津派）に分かれた。また、科挙合格者の分布が一部の派に偏っていたため、いわゆる「非対称的な分節化」⁽⁵⁷⁾の現象が起った。

ところが宗族には内部分化が一方的に進行するのではなく分裂していた諸派を人為的に統合しようとする動向もあったという。⁽⁵⁸⁾楊一族にもこうした動向が見られた。十五世紀以降、楊榮は族内有力者として四つに分岐した派の統一をはかった。ただ族内での指導権を確保するためには、科挙合格に由来する自分自身の優位性を族人に再認識させる必要があると考えた。

楊榮はすでにある事実（科挙に合格し官途も順調）に

対し自己解釈をつうじてさらに権威づけする論理として、当時の福建地域で流行していた風水思想を活用した。すなわち自ら作成した風水説話のなかで祖父の德行を唱え、楊達卿が生前に設置した万木林および死後に埋葬された白鶴山を風水的に優れた土地へ転換させようとした。換言すれば、万木林と白鶴山はいずれも人為的に創造された吉地であった。

以上のような万木林説話の制定過程についての考察をとおしてみれば、楊栄にとっての万木林は自分自身の科挙合格をもたらす神秘的な力を有した風水林的存在のみならず、福建各地に散らばる族人の結集力を向上させ、個々の分派を縦の組織に統合する過程にあつて特定の派の優位を正当化するためには欠かせない象徴物の一つであつたことがわかる。とすれば、楊栄をはじめとする楊一族の行動は「一見『風水林』を保全するためのよう」に見えて、実はその行動の内部にそれ以外の目的を含んだものがあつたといえるのではないだろうか。

ところで、上述の動向は清代以降に変化があつたか否か。これについてはおそらく道光年間に編纂された『東楊宗譜』の検討をとおして明らかにすることができるのであろう。

註

- (1) 上田信「山林および宗族と郷約―華中山間部の事例から―」(木村靖二・上田信編『人と人の地域史』山川出版社、一九九七年)一〇四頁、同『森と緑の中国史―エコロジカル・ヒストリーの試み』(岩波書店、一九九九年)二〇二頁。
- (2) デ・ホロート著、牧尾良海訳『中国の風水思想―古代地相術のパラード―』(第一書房、一九八六年)一四頁および二二頁。
- (3) たとえば「風水と山林の保全」について上田信が取り上げた四つの事例は建甌県、清流県、沙県、政和県と全部福建のものであるように(上田信『トラが語る中国史・エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社、二〇〇二年、一四〇―一四四頁)、福建地域における風水林の保全現象は顕著だつたと考えられる。
- (4) 牧野巽は宗族組織を重視する傾向について「南支那の広東・福建等にこの傾向が最も強く、それから北へ行くに随つて宗族の結合は弱く」なると述べている(牧野巽著、市古宙三・内藤莞爾・中野卓編『牧野巽著作集』第二巻 中国家族研究(下)、御茶ノ水書房、一九八〇年、二二二頁)。
- (5) 瀬川昌久「香港新界における宗族の発展と墓地風水」『国立民族学博物館研究報告』一七巻二号、一九九二年)三〇七頁。
- (6) たとえば森正夫の实地調査によれば、寧化県河竜郷明珠村の後竜山は風水林でありながら族有林としての性格

をも有するものであるという(森正夫「地域社会与森林・伝統与現在」『人文研究期刊』二〇一一年九期)。

- (7) たとえば渡辺欣雄「風水の社会人類学——中国とその周辺比較」(風響社、二〇〇一年 第六章、中国の墓地風水や上田信「風水という名の環境学——氣の流れる大地——」(農山漁村文化協会、二〇〇七年) などが挙げられる。

- (8) 中国語圏の研究では代表的なものとして関伝友の一連の論考がこれに相当する。たとえば関伝友「古代風水林探析」(『農業考古』二〇〇二年三期)、同「古代風水林与绿化思想」(『寻根』二〇〇二年四期)、同「风水意識对古代植樹護林的影响」(『皖西学院学报』二〇〇二年一期)、同「論明清時期宗譜家法植樹護林的行為」(『歷史地理論叢』二〇〇二年四期)、同「徽州地区的風水林」(『寻根』二〇一一年二期)、同「風水景觀——風水林的文化読解」(南京、東南大学出版社、二〇一二年)。また日本の研究では「エコロジカル・ヒストリー」の視点からこの問題に接近するものに上田前掲「森と緑の中国史」一九七二—二〇一頁、上田前掲「トラが語る中国史」一四〇—一四四頁がある。なお森前掲「地域社会与森林」は福建省を事例とし、地域住民が行う山林の保全管理について考察したものである。

- (9) 魏郁欣「清代福建の宗族と墳樹——福州郭氏を具体例として」(『東洋学報』九七卷一号、二〇一五年)、同「清代の墳樹紛争に見る福建宗族の資源獲得戦略——清流安豊羅氏を例として——」(『東方学』一三四輯、二〇一七年、刊行予定)。

- (10) 『楊族之譜』は楊繼震修、民国五十一年(一九六二)油印本、建甌市図書館所蔵。『八閩三楊匯譜』(楊榮世家卷)は楊青編、香港、国際炎黄文化出版社、二〇〇二年。『中華楊氏通譜(古代卷)』は楊青編、福州、線装書局、二〇〇七年。なお、一九九〇年代に成立した建甌市楊榮研究会の編集による『楊榮研究文集』(建甌、同研究会自費出版、一九九九年)では、道光七年(一八二七)に編纂された『東楊宗譜』について紹介しており(江明星「二脈相承炎黄後——漆村『東楊宗譜』簡介——」、筆者はそれをまだ見る機会がない)。

- (11) 『楊文敏公集』卷二二、楊榮著、正徳十年(一五一五)建安楊氏重刊本、台湾国家図書館所蔵(洋装本・台北、文海出版社、一九七〇年)。

- (12) 建甌県地方志編纂委員会編『建甌県志』(北京、中華書局、一九九四年)第五篇、林業、第六章、万木林自然保护区。

- (13) 民国『建甌県志』卷四、山川、大富山「元季楊達卿出資種樹」。

- (14) 嘉靖『建寧府志』卷一八、人物、高行、楊達卿「宗族之貧者、病者、喪不能葬、孤而不能成婚嫁者、咸周之。鄉党亦然」。

- (15) 嘉靖『建寧府志』卷三、山川、大富山「惟学校・祠廟・橋梁及貧民養生送死之需、用之」。

- (16) 阮德柔(？)、字は伯剛、福建寧徳の人。元末に建寧路総管を務めたが、その後、明朝に降伏した(『閩書』卷一二三)。

(17) 『八閩三楊匯譜（楊宋世家卷）』四、顕祖傳略、達卿公行実「郡守阮德柔因作万木図美之」。なお、元至元十六年（一二七九）に建寧路が置かれ、七県、すなわち建安、甌寧、浦城、建陽、崇安、松溪、政和を管轄したが、明洪武元年（一三六八）には建寧府が設置された。明清時代には知府の別称としてしばしば郡守が用いられた。したがって明の時代に生まれた楊栄がここでいう「郡守」とは、おそらく建寧路総管のことを指すであろうか。

(18) 『楊文敏文集』卷一六、事実、所収。

(19) 胡広（一二七〇～一四一八）、字は光大、号は冕菴、江西吉水の人。建文二年（一四〇〇）の進士。最初は翰林院編修に任命されたが、その後、翰林院侍講や翰林院

学士、文淵閣大学士などを歴任した。著作に『胡文穆雜著』がある（『明史』卷一四七、列伝三五）。

(20) 嘉靖『建寧府志』卷三、山川、大富山、所収。

(21) 楊士奇（一二六五～一四四四）、名は寓、号は東里、江西泰和の人。王叔英の推薦によって建文元年（一三九九）に翰林院に入り、『明太祖実録』の編纂に従事することになった。永楽帝の即位後、内閣に入り、永楽・洪熙・宣徳・正統の四朝にわたって政務に参与した。著作に『三朝聖諭録』、『奏対録』、『歴代名臣奏議』、『東里文集』などがある（『明史』卷一四八、列伝三六）。

(22) 『東里文集』卷四、所収。

(23) 王紱（一二六一～一四一六）、字は孟端、号は友石生、九竜山人、江蘇無錫の人。洪武二十一年（一三八八）の進士。永楽年間、文淵閣に入ったが、その後、中書舍人

にまで昇った。詩文や書画に優れたことで有名である。著作に『王舎人詩集』がある（『明史』卷二八六、列伝七四）。

(24) 『王舎人詩集』卷二、所収。

(25) 金幼孜（一二六八～一四三三）、名は善、号は退闇、江西新淦の人。建文二年（一四〇〇）の進士。最初は戸科給事中を授けられたが、その後、文淵閣大学士や翰林院学士、禮部尚書、武英殿大学士、太子太保などを歴任した。著作に『前後北征録』、『金文靖集』がある（『明史』卷一四七、列伝三五）。

(26) 『金文靖集』卷八、所収。

(27) 『楊文敏文集』卷一六、事実、万木図事実「昔先大父達卿公、天性純孝、樂善好義。凡先世墳墓所在、必令子孫分居、以供祭祀。竜津大富山者、先塋所在。公居其旁。山延袤数十里、其下沃壤。每歲東作、公率子弟躬耕、以備糗盛。旦暮服勤不懈、暨歛穫比它壤倍。登常祀外、以其贏貯之。復置機舂二、賃者随意出直。積数年、廩庾充物。值歲大歉、郷人乏食。公欲發廩賑之、恐為人所忌、乃託言其山将募人種樹、有能植杉木一株、自償粟一十。於是貧者畢至、至則飯之、給粟而去、亦不録其姓名。粟既尽、公乃閉閤昼寢。忽夢老人素衣策杖、自山而來曰、汝所種樹成矣。盍往觀之。公異其夢、然亦不以為意。逾數載、山木茂盛、望之蔚然、陰翳扶疎、井然布列。公乃追感前夢、慨然歎曰、此雖晝夜之所息、雨露之所濡、未必遽能均育也、豈山之神靈有助於我耶。因戒子弟曰、吾初非有意種樹、特托此以濟貧耳。其種与否、亦未嘗較。

今暢茂若此、殆非偶然。汝等當遵吾言、此山之木、誓不售人。惟作橋梁・学舎・寺觀・神祠。及貧無室廬、死無棺槨者、則与之。有不如吾言者、非賢子孫。

- (28) 『楊文敏文集』卷一六、事實、万木園事實「數年以來、旧木殆尽、而萌蘖之生、又復繁密。發榮滋長、蓋不可數計。人咸謂、公有活人之德、故斯木生意沛然。而公之子孫繁衍、寔克似之。是皆公遺沢所及」。

- (29) 『金文靖集』卷八「公没後二十余年、山木之萌蘖者、至是復發榮滋長、沛然若前日之暢茂、而不可禦。人咸以為公德善積久之応。其見於生物之盛者、豈徒然而已哉。蓋將以為公子孫蕃衍盛大之徵耳」。

- (30) 嘉靖『建寧府志』卷三、山川、大富山「人謂、達卿有及人之德、故山木勃郁、有以見其遺沢之遠」。

- (31) 『明史』卷一四八、列伝三六、楊榮。

- (32) 『楊文敏文集』卷一六、事實、万木園事實「実我祖宗積德深厚、所以致此」。

- (33) 『楊文敏公集』卷九、記、白鶴山房記「榮家建寧去城東二里有山。高壯雄偉、其勢昂然、望之若鶴。……蓋隱然一善地也、人多求葬而不可得。榮先大父存日、種德積善、孝行純至、既歿而窆窆未卜。方是時、真如寺僧無涯將有所宮建、而乏材。乃邀鄉先生蘇公明遠踵門求施。先伯父彥禎即集兄弟、予以竜津之木三万株、兼資以運輸之費。僧大感悅、其後知先大父未葬、遂舉其地以奉、且曰、此嘗有人酬以重価、而吾弗之許。誠有所待者、願以是為報。於是筮之而吉、遂奉柩藏焉。……榮游郡庠時、嘗率群季読書其中。自後忝科第、列職詞林、叨承眷遇、光寵

極矣。是皆先人遺沢所庇、故能獲此」。

- (34) 『楊族之譜』不分卷、五十六代、宗興公「殆公八十有五而卒。兄弟議載父乘舟尋葬。當至甌邑豐樂里停舟、溪西之傍偶有術士。近詢、舟肯渡否。齊允載過。越日又至。如是者三、並無愠色。術曰、無可以酬、汝有父骸未葬、道吉地、以報三渡之恩。遂指其山曰、此山發自武夷、清氣如梁。其水流由崇邑、潮声若雷。形乃雌雄、竜穴穴有白狸端眠、坐乙向辛、案朝筆架。前文峯、後三台。算來正恰安葬吉日。汝今夜急尋眠処、扶柩安葬、自然子孫發福。言畢、竟往。欲留不得。兄弟遵言、是夕、扶柩登山、尋至五更、風寒侵人、衆声霹靂、狸即驚起、三伸三跳而去。忙將父骸葬眠処、回舟。乃是宋真宗祥符辛亥四年十月望越六日。術士復至問、有白狸端眠否。答曰、果有之。被衆声霹靂、狸驚起三伸三跳、悠然而逝。術賀曰、三伸三跳、當蔭三朝高官、富貴綿遠矣。請術回家致謝、叩其名号以酬。術曰、汝祖累世積德、今得福地、豈偶然哉。何敢望報。言畢、堅辭而去。兄弟欲留不得、曰、子莫非仙乎。然後反舟回家」。

- (35) 『八閩三楊匯譜(楊榮世家卷)』二、光輝世家、(四)仕宦、および『中華楊氏通譜(古代卷)』一七四、一七五頁。

- (36) 『重刊人子須知資孝地理心学統宗』卷六之上、水法、建安楊文敏公祖地「上地在甌寧県之豐樂里、地名白狸窩。因異人指白狸臥処是穴、今土人遂呼地名白狸窩。……真大貴之地也」。

- (37) 江西德興出身の徐善繼と徐善述という兄弟は有名な人

物を輩出した名族の祖墓を実地調査したうえ、それに關連する墓地風水について具体的な説明を行い、『地理人子須知』という風水書を嘉靖四十五年（一五六六）に刊行した。風水の多くの流派を総合しようとする本書の編纂方針は後世の風水書に大きな影響を与えたという（三浦國雄『風水講義』文藝春秋、二〇〇六年、三六―四〇頁参照）。

(38) 『重刊人子須知資孝地理心学統宗』巻六之上、水法、建安楊文敏公祖地「葬後三百年始出文敏公榮拜相、曾孫且吏部尚書、科甲蟬聯、登仕籍者數十人。至今榮盛未艾。」

(39) 嘉靖『建寧府志』卷二、雜記「楊万大、崇安人、好恬靜、結茅武夷、漁樵山水間。夜則懸灯独坐、弦琴咏詩以自娛。山下有津渡。一夕有道士黃冠玄服。貌甚偉。往武夷宮、瞑不得濟、扣門止宿。自後數往來、万大礼之。久而益勤。一日復來謂曰、吾非世人也。今当歸洞天、特來別汝。吾觀汝所為甚善、天必有以報之。汝老矣、其在後人乎。命舟欲与偕去。万大始異之、既而戚然告曰、吾二親喪、未卜窆。豈可去。道士曰、待汝襄大事、与汝偕往、未晚。因与共舟、至甌寧豐樂里、指示溪湾秀峯下曰、汝于某年月日奉父母柩于此。俟有白狸眠处、即葬所也。白狸起、即葬時也。万大俟期、奉柩至山中、果見白狸、如所言葬之。不逾年、而他处子孫聞其地饒衍、多來居之。因名其地曰楊墩、墓曰白狸。時年已九十有七。嘗昼寢夢前道士來迎曰、汝今家事畢、当与俱去。覺即沐浴更衣、端坐而逝。今太師文敏公榮、万大之後也」。なお、崇禎『武夷山志』卷五、存疑、楊万大および「武夷山紀

要』不分卷、靈異紀、楊万大にもほぼ同じ内容のものがある。

(40) 江明星「楊墩白狸窆楊榮祖墓考」附件二、太師公在京伝帖「本族有墳一所、坐落甌寧豐樂楊墩、建造牌坊。係祖遇仙指示白狸眠处葬祖宗興公墓穴」（前掲『楊榮研究文集』六五―六六頁）。

(41) 『中華楊氏通譜（古代卷）』一七四頁。

(42) 『楊族之譜』不分卷、五十七代、季瑞公「後丁殷家富、改曰楊墩」。

(43) 『楊族之譜』不分卷、六十代、鎮公。なお、明清時代の宗族組織は族譜の編纂や祠堂における祖先祭祀、族産の設置などを特徴としているが、「実のところ、宋元時代にはこうした『三点セット』を完備した宗族はむしろ例外的」であるといわれるように、宋元型宗族の特徴は「墳墓における祖先祭祀」にあり、とくに一族の歴史において重要な先祖を選択して墳墓における遠祖祭祀をととして宗族統合をはかることがわかる（中島楽章「元朝統治と宗族形成——東南山間部の墳墓問題をめぐって」井上徹・遠藤隆俊編『宋・明宗族の研究』汲古書院、二〇〇五年、所収）。

(44) 『中華楊氏通譜（古代卷）』一七五頁。

(45) 『楊文敏公集』付録、明太師楊榮行実「族人有喪不能举者、悉為葬之。孤弱不能自存者、悉収養嫁娶之。有因産業致爭者、割已業畀之」。

(46) 『楊文敏公集』付録、明太師楊榮行実「創祠堂二十余楹、構所居之堂、扁曰清白」。

- (47) 『楊族之譜』 不分卷、明太師楊榮原序。
- (48) 前掲『楊榮研究文集』六五、六六頁。
- (49) 民国『建甌県志』卷二七、孝友、楊讓「又購田二頃、以給族里嫁娶喪葬不能為礼者」。
- (50) 『崇安楊氏族譜』序五「其嗣拳族入閩、有居建陽者、有居建安者、有居浦城崇安者、有居浙江竜泉者。楊氏之盛竟若此也、嗚呼」。
- (51) 『楊族之譜』 不分卷、明太師楊榮原序。
- (52) 上田信は福建省で出版されたことから、『地理独啓玄闕』を、「地域と時代を色濃く反映している」明代福建の典型的な風水書として紹介している(上田前掲『風水という名の環境学』二二頁)。
- (53) たとえば「公位論」(卷三)や「捫師説」(卷四)、「審主徳」(卷四)、「積徳不積徳之証」(卷四)などが挙げられる。
- (54) 『地理独啓玄闕』卷二、童山辯疑「先師云童山不可葬者、以其無生育之機也」。
- (55) 『楊文敏公集』卷一五、書江氏陰徳卷後「人有是徳者、雖不求知不責報、而天之所以報之者、自不能違矣」。
- (56) 『楊文敏公集』卷一四、双桂堂序「草木雖微者、然其発榮滋長、往往足以兆人之興盛」。
- (57) イギリスの文化人類学者フリードマンによって提出された「非対称的分節形成」とは、宗族内部において経済力や社会的地位に大きな差異があるため、実際には各分節が不平等な状態に置かれたという(M. Freedman, *Lineage Organization in Southwestern China*, Oxford, 1965 [成道男・西澤治彦・小熊誠訳]『東南中国の宗族組織』(弘文堂、一九九一年)七一頁)。
- (58) 宗族組織統合についての研究に上田信「地域と宗族——浙江省山間部」(東京大学『東洋文化研究所紀要』九四冊、一九八四年)や田仲一成「蕭山県長河鎮米姓祠産簿剖析——清代浙東宗族における祠産形成と組織統合の過程」(東京大学『東洋文化研究所紀要』一〇八冊、一九八九年)などがある。